

萩原朔太郎記念

水と緑と詩のまち

# 前橋文学館報

No.28 2007.9



## 「朔太郎と『異国』」

安藤 元雄

平成十九年五月十三日に開催された第35回朔太郎忌で、詩人の安藤元雄さんによる講演が行われました。以下にはほぼ全文を掲載します。

安藤でございます。この演壇に立つのは、ここで賞を頂いた時で、その後も何かの折にここへ上がった覚えがありますので、なんだか前橋の文学館というはずいぶん通い慣れた場所だというような気がいたします。

今日は、萩原朔太郎研究会も主催する催しで話をしなさいということ、そちらにいらつしやる那珂太郎さんからご連絡を受けて上がったようなわけですけど、この朔太郎研究会の毎年の催しが会報に載っているのをずっと拝見してきました、この朔太郎研究会というのは、一地方都市の文化団体のレベルというものはるかに抜いている、大変に質の高い会合をやっているとところだというふうに読み取れましたので、今度はそこへ自分が行って、なにやらもつともらしいお話をするとするのは、ちょっと恐ろしいことにも思えました。もう少し通俗的な会であるならば、こちららも気軽に来ることができるのですが、そういう場所ですので、ある程度の準備をしないと行かれないぞということで、ここ二三日なるべく家から一歩も出ないようにして勉強をしたわけです。ただもう私も年を取って、頭の中がいい加減になってきております

ので、どこまで実のあるお話ができるかどうかわかりません。その時はどうかご容赦下さい。

## 一、朔太郎と「ふらんす」

去年は朔太郎の生誕百二十周年で、前橋に限らずいろいろなところで朔太郎に関する催しがありました。その一つに東京の日仏会館、日本とフランスの文化交流をやる所ですが、そこでもって朔太郎とフランスという題で何か話をしろという依頼が突如舞い込んだんです。朔太郎とフランスと言えば、語呂合わせではありませんが直ちに思い当たるのは「ふらんすへ行きたしと思へども」ですね。まあ、あれが材料になるから、あと少し何か探せばもう二つ三つ材料も見つかるだろうと思いついて、お引き受けをしてみました。まず何よりも、今の日仏会館を運営して日仏文化交流に携わっている方々というのは、だいたい私から見ても大学の仏文科の先輩に当たる人が多いんです。先輩の言うことですから、いやですとか、行かれませんとか、そういう返事をするのがちょっとできないものです

から、「ふらんすへ行きたしと思へども」一つあればなんとかなるだろうと思つて引き受けたら、これが大変な間違いでござい  
ました。

つまり朔太郎がフランスという国の名前を使ったものはほとんどないんですね。「ふらんすへ行きたしと思へども」というあの「旅上」という詩ですが、これ一つくらいなんです。すっかり参つてしまひまして、いわば他に証拠がないので傍証だけを引つ張つて、状況証拠だけで犯人を断罪するようなことをしなければならぬという前置きを振つて、まあなんとかかんとか一時間半ぐらいのお話をしたのですが、この「旅上」という詩も、本気でフランスをうたつた詩ではないんですね。本当はこのテキストをプリントしてお配りするといひのでしようけれども、ここは朔太郎研究会です。だとすると、皆様方は朔太郎の詩の十や二十は暗誦しておられるに違ひない。そういうところで変なプリントを配つたらかえつて誤植を指摘されたりするだろうし、また皆様方に対して失礼になるのではないかと思ひましたので、今日は一切プリントは作らないことにしました。ですから、テキストを引用する時は仕方がありませんから、わたくしがここで朗読いたしますが、「旅上」旅という字に上る、旅に上るといふ意味の詩だと思ひますが、

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背広をきて

きままなる旅にいでてみん。

あと、「汽車が山道をゆくとき」云々云々と、まあ汽車が走つて行く途中で窓から見える景色とか、その時の浮き浮きするよ  
うな気分とか、そんなものをうたつて行くんですが、実はこれ  
フランスへ行く旅じゃないんですね。日本からフランスまで汽  
車では行かれませんが、この朔太郎のころは、行くとしたら、  
船に乗らざるを得なかつたでしょう。今なら飛行機で直行便も  
ありますから簡単に行かれますが、当時はまあ船で何十日かか  
けなければ行かれなかつた。ですから、汽車に乗つただけでフ  
ランスに行こうというのは、もう初めから成り立たない話であ  
ります。

さらによく読んでみると、フランスは遠すぎるから仕方がな  
い、やめておこう。ただフランスという国のことを思つて新し  
い背広を着て、つまり少しはおしゃれな格好をして気の向くま  
まの愉快な旅行をしようではないか。というわけで、話の枕に  
振られただけで、あとはフランスは出て来ないのです。しかも、  
この「ふらんす」が、片仮名の「フランス」でもなく、それから当  
時ならおそらくこう書いたであろうと思われる仏という字に  
植物の蘭、そして西、「仏蘭西」と書いてこれでフランスと読ま  
せていた、こういう漢字でもないんですね。平仮名で「ふらん  
す」と書いてある。実に不思議な表記なんです。どうもこうい  
うところを見ると、この「ふらんす」といふのは、ヨーロッパに  
実在する国名としてのフランスではなくて、朔太郎の頭の中に  
宿つた、それもほんの一瞬だけ宿つて、あとはこの詩の皮切り  
役を務めただけであつたと消えてしまつた「ふらんす」といふ  
ことになりませう。もう少しはつきり言えば、「ふらんす」といふ

のは多分こんなふうな楽しい国なんだろうと、朔太郎の側からの一方的な思い込みで、虚空に描かれた国ということになるでしょう。

つい最近フランスでは、大統領選挙がありました、能力に応じた競争社会を作ろうという一派と、そうではなくて、みんなの格差をなくしてものような福祉国家にもどうだろうという一派とが激しく戦った。まあ、後者が負け前者が勝ったんですが、フランスという国は政治家の一人や二人が当選したり落選したりただだけで、国中がコロリと変わるほどのいい加減な国ではありません。もつともつとしたたかな国民がそろっている国なので、あの選挙の結果がどうなるかが、これから我々は政治家ではなくてその国民のほう、あるいはフランスの文化・文明の方に注目して行けばそれで十分というふうには思っています。まずけれども、まあ、そういう選挙がこの間あったわけです。新聞などにも伝えられましたし、皆さんもフランスという国にはそれぞれ一定のイメージをお持ちになつていらつしやるだろうと思われませんが、しかしあの大統領選挙の投票率が八十パーセントを超えたというんですから、すごいですね。日本ではとても真似ができない。国民が百人いれば、そのうちの八十五人ぐらいが政治に強い関心を持っている。自分の国の将来の姿をどうすべきかということの本気で考えている。その中には利己主義もあるでしょう。例えば若い人が失業している。その失業はかなわんからなんとかしてくれというので、若い人が自分の利益のために一票投ずるといことは当然あるでしょう。政治から利益誘導という言葉を引きいたならば、政治は

何にも残らなくなるでしょうからね。利益誘導というのは悪いことのように言われていますけれど、実は利益誘導の巨大なシステムが政治というものです。そのくらいのことを見抜くだけのしたたかさを私どもも身につけましょう。そして、見抜いた上で私たちは自分自身の文化・文明を作っていけばいいわけです。それにしてもあの投票率には本当に帽子を脱ぐ思いですね。それもそのどこやらの社会主義国家のように強制動員で投票率を上げているなんてことは全然ない。あるいは中東方面のイスラム国家のように宗派が対立して両方とも一生懸命勝とうと思つて、いわば宗派争いをやつて投票率が上がるというふうな国でもない。明らかに世界の先進国の一つであるフランスが、あれだけの投票率を出したというのは大変なことであります。立候補した政治家よりも、それに票を入れて行ったフランス国民の方に頭が下がるという気がします。

しかし、こういう具合で、萩原朔太郎の詩の「旅上」では、「ふらんす」という国名は枕に振られただけであつた。日仏会館の方向はずいぶんがっかりしたみたいです。ほかにないっていうんですから。ないっていうのを講演でやるのは大変なんです。あると云うのは簡単なんです、見つければ良いわけですから。ないといふことを言うのは、全部さがしてどこにも出てこないのを確認した上でないと、言えないんです。ですから何々がありますという話は誰でもできる。何々がありませんという話はそれこそ半年、一年かけて『萩原朔太郎全集』全巻を読み抜いた上でなければ言えないんです。私もそこまではやりませんでしたけれども、そういうような話を日仏会館でしてきたばか

りであります。

それならば朔太郎は、フランスもしくはフランスを含めたヨーロッパ諸国と一切無縁だったのか。確かに朔太郎は海外へ出たことはありません。これは、今日、この後でお話があるはずの大手拓次についても同じです。ですけれども、今自分の置かれているこの日本の群馬県の前橋から、どこかほかの国へ行けたら行ってみたいというふうな気持ちはいつも持っていたんじゃないか。そういう意味では異国、違った国というのはかなり複雑な内容を持つ重要な言葉なのではないかと私は思いました。

今日、この後で大手拓次についてのお話がありますが、その資料として、大手拓次と萩原朔太郎の平行年譜のようなものをお作りになられて、それをさっき私も頂いて拝見しました。ああいう年表の使い方というのはとても大切なことで、これは良い資料になると思います。皆さんどうぞ、大切にお持ち帰りになつて下さい。

その年譜で見ますと、大手拓次は「異・香」という雑誌を企てています。長続きしなかったらしいんですけど、この「異・香」というのは、[異国の香り]を縮めたもので、「異国の香り」というのはボードレールの『悪の華』の中に出てくる有名な作品の題名であります。「PARFUM EXOTIQUE」と言います。この「PARFUM EXOTIQUE」、なかなかこれ、訳すのが難しいんですね。普通は誰でも「異国の香り」と訳しておりますけれども、堀口大学という方がおられます、この方にも「悪の華」の全訳があるんですが、そこではこの作品の題を「異なにほひ」と

訳しておられます。つまり変な匂いだ。変というのは何かという、実はこの「異国の香り」という詩はお読みになればわかりますけれども、恋人がいまして、その恋人の肌の匂いだというふうには、はっきり書いてあります。つまり体の匂い、体臭です。この恋人は実は黒人の血が混じっていました。多分白人とはいくら違う体臭を持っていたんでしょう。その恋人が裸体で横たわっている。その胸の辺りにこちらが顔をうずめていると、その臭いに触発されていろんな風景が、景色が見えてくるといふ、そういう内容を持った詩なんです。そこで堀口大学先生は、あのようなエロティックな道にも精通されていた方でしたから、あえて「異なにほひ」と訳されて、そういうややエロティックな肉感的な意味をも題名で出そうとなすったということになります。しかしこれはちょっと訳し過ぎじゃないかと思えます。「EXOTIQUE」と書いてあるんですから、やっぱり外国的などという意味でしょう。それを「エントコな」「異など」というのではちょっと訳し過ぎているような気がします。しかしそういう異国というのは、大手拓次にもかなり大事な要素としてあった。朔太郎にもどうやらそれがあったということは言えるのではないかと思います。

試みにですね、この「旅上」という詩の「ふらんす」を、わたくしもこのときの日仏会館の準備をするのにずいぶん困り果てたものですから、他の国じゃ駄目か、という実験をいろいろやってみたんです。「イギリスへ行ききたしと思へども／イギリスはあまりに遠し／せめては新しき」これはだめ、成り立たない。なぜなら、私どもが持っているイギリスという国のイメー

ジは、せめて新しい背広でという、そういうふわふわ浮ついた感じではないんですね。もう少し重厚でありまして、それだけに融通のきかないところもある、そういう国のイメージがあります。ですから「いきりすへ行きたしと思へども」と書いたのは、たとえ平仮名で国名を書こうとも駄目です。それでは、スペインはどうだろうか？「スペインへ行きたしと思へども」スペインはあまりに遠し「これはあまりにも当たり前であつて、確かにスペインは情熱の国だなんだと言いますが、そんなことはまあお互い常識として一応は知っているわけですから、「スペインへ行きたしと思へども」と言つても、あまり詩として

豊かな内容にはどうもなりそうもない。イタリアはどうか？「イタリアへ行きたしと思へども」これもやつてみた訳ですが、これはいくらか成立するような気がいたしません。イタリアは美の国であり、美術の国であり、そしてナポリ民謡などの国でもあり、何よりも古代ローマ帝国以来の遺跡も沢山ある。そういうわけですから、ここへ行つてみたいというのは、ある程度、旅行好きの人の気持ちとしてはわかりますが、しかしこれ



もフランスにはかなわないでしょうね。まあ、半分ぐらい。ドイツはどうか？ ドイツはなにしろ日本語で「どいつ」と三音しかありませんから、駄目であります。もともと平仄ひょうそくが合わないんですが、無理にやるとやつぱり成り立たないですね。ドイツへ行きたいというのをそう強烈に思うというのは、ないだろうという気がします。そういうわけで他の国名をいろいろ当てはめて実験をした結果、これはやつぱりフランスしかあり得ないんだということに、ようやく私も気が付きました。だとすると朔太郎は、このフランスを、ただこの短い詩の枕に振つただけではなくて、何かある狙つた的みたいなものがあつて、そこをズバツと射抜いたのではなからうかと思つたわけですね。フランスが作者萩原朔太郎の目から見ても何かある種の必然をもつて言われたのだとすれば、そこから日本以外の国に対する朔太郎の考え方みたいなものを導き出すこともできるのではあるまいか、そんなふうに思いました。あとはそれを、あつちを掘り下げこつちを掘り下げして、なんとか日仏会館での話の形だけはつけたんですが、今日はそのお話をなぞるだけでは意味がありませんので、もう少し別のお話をしたいと思います。

## 二、朔太郎の被害者意識

この旅上という詩は、朔太郎の『純情小曲集』という詩集に入っています。『純情小曲集』というのは、前半と後半に分かれておりまして、前半が「愛憐詩篇」、「あい」は愛するの愛、「れん」はりっしんべんの憐、つまり憐れむとかいとおしむとかそういう

う意味でしようけれど、その「愛憐詩篇」という部分が前半にあります。その中に入っております。『純情小曲集』の後半の部分というのは、「郷土望景詩」、かの名高い「郷土望景詩」で、これはもう、前橋にお住まいの方でしたら、どなたでもご存知でしょうし、また、その詩を聞くとなんだかいくらか胸が痛くなるというようなこともあるかもしれません。そういう作品です。

「郷土望景詩」は朔太郎の詩の中ではやや後期に書かれたもの、それに対して「愛憐詩篇」は『月に吠える』よりも前に書かれておりますから、書かれた時期がかなり違う二つの詩の集まりをくつつけたのが『純情小曲集』になる。その二つの要素の共通点というのは、いずれも文語体であること、そして感情をかなり激しく表に出していること。特に「郷土望景詩」の方はもう、怒り狂っているような激しさがありますね。そして朔太郎自身はこの『純情小曲集』に自分で序文をつけておりまして、この「自序」の中でこんな風に言っております。

「愛憐詩篇」の中の詩は、すべて私の少年時代の作であつて、始めて詩といふものをかいたころのなつかしい思ひ出である。この頃の詩風はふしぎに典雅であつて、何となくあやめ香水の匂ひがする。いまの詩壇からみればよほど古風のものであらうが、その頃としては相当地に珍らしいすたいるでもあつた。

この「自序」の日付は「西暦一九二四年」とあります。今なら西暦を使う人は多いでしょうが、当時、西暦で日付を書くこと

いうのは、それ自体が相当に、いわばつむじ曲がりですよ。日本には明治、大正、昭和とれつきとした、年号があるわけですから、西暦で日付を書いたという一つだけを取つても、朔太郎嫌いの人から見れば、西洋かぶれのおつちよこちよい、ということになりかねない。そういうことを平気でやつてのけたわけです。

この西暦一九二四年というのは、ご存知のように関東大震災の翌年ですね。その時に詩集をまとめて、こんな自序を書いた。ところがこの一九二四年にこの詩集は出ませんでした。もう一年かかりまして、出たのは一九二五年になってからです。それまでに原稿はそろえ、序文なんかも付けて、いつでも出せるように準備しておきながら、なかなか出るのに手間がかかった。しかし、この中で「愛憐詩篇」の部分はさつき申し上げたように『月に吠える』よりも前ですから、相当古いものを集めている。現にこの同じ詩集に友人として序文を寄せた室生犀星が、「珍らしいものをかくしてゐる人への序文」という長い題なんです。その中でこれらの詩について、「いまから十三四年前に始めてわたしが萩原の詩をよんだときの、その原稿の綴り」という言葉を書いています。この綴りを朔太郎はずつと取つておいて、やがてこれも詩集にしようかしらと言つて室生犀星に見せたというんですね。室生犀星は十三から十四年前のものと言つてますから、一九二四年春の十三から十四年前というふうに逆算をいたしますと、だいたいもう明治が終わるといふ、日露戦争は終わっています。間もなく明治時代そのものが終わりを告げるといふ、そういうころのものだということになるうかと

思います。

そういうわけでこの詩集は、出るのがさらに一年かかったわけですが、朔太郎はこの「自序」のほかに、その序文の後ろにもう一つ「出版に際して」という序文を書いています。そこで、さつきは「愛憐詩篇」について自ら触れたわけですが、今度は「郷土望景詩」の方に触れて、こう書いています。

郷土！いま遠く郷土を望景すれば万感胸に迫つてくる。かなしき郷土よ。人人は私に情なくして、いつも白い眼でにらんでゐた。単に私が無職であり、もしくは変人であるといふ理由をもつて、あはれな詩人を嘲辱し、私の背後から唾をかけた。「あすこに白痴が歩いて行く。」

「ばか」というところには「白痴」という漢字を当てて、それに「ばか」とルビが振つてあります。今日なら差別用語でとても使えない、ましてこんな演壇ではしゃべれない言葉ですが、これは書いてある字を読んでいるだけです。それで、

「あすこに白痴が歩いて行く。」さう言つて人人が舌を出した。

というふうな、故郷前橋の人々に対する、いわば恨みつらみを述べ立てているわけですね。こういう「出版に際して」という短い文章を書き加えた上で、翌年やつとこの詩集は出ます。

しかし、この「郷土望景詩」の怒りの激しさももちろんですが、これは朔太郎最晩年の詩集である『氷島』の怒りにも通ずるものですけれども、若いころの作とされる「愛憐詩篇」の方は、この「ふらんすへ行きたしと思へども」だけではなく、とても甘い、いい詩がたくさんあります。今日の朔太郎のポピュラリティーというものがもしあるとすれば、そのかなりの部分はこの「愛憐詩篇」に負っているのではなからうかと私は思います。たとえば「再会」という詩があります。

皿にはをどる肉さかな

春夏すぎて

きみが手に銀のふほをくはおもからむ。

云々と続くわけですが、これなんか良い詩ですね。私はいつ読み返しても、頭の中でいつ思い出しても、何かうっとりしてしまう。電車の中なんかで思い出して、ついうつとりしてにやつとすれば、他の乗客からは、あのじいさんは何をにやにやしているんだと怪しまれるかもしれない。でも素晴らしい詩です。特に私が好きなのは三行目、「きみが手に銀のふほをくはおもからむ。」のところ。つまり、恋人にある長い時間を経た後で再び会ったわけですね、そしてレストランで食事をしていくわけです。そのレストランの情景を、やれ大理石の床だとか、こおろぎが鳴いているとか言っている。中ほどにいくと、「ええてるは玻璃をやぶれど」というすこい一行も出て来ます。「ええてる」というのは、空間の中に瀾漫している、どこへ行つ



でも行き渡っているという仮説で考えられた、ある微妙な媒体で、それは光が波なものですから、何もなければ光は伝わって来ないはずだというわけで、まだ相対性原理より前の話ですから、「ええええ」というものが空間に、空気とは別に行き渡っていて、それに乗って光が届いて来るのだろうというふうに考えられていました。空気がなくなると音がなくなりますので、宇宙空間へ行くと音は聞こえないわけですよ。ところが光はちゃんと宇宙空間であろうと何であろうと届いてくるから、これは真空の中であろうとどこであろうと行き渡っていると思われる、「ええええ」というものがあるのだと、そういう仮説で当時考えられていた存在です。「ええええは玻璃をやぶれどこの「玻璃」というのはガラスのことで、そうすると、要するに言いたいことは、光線が窓の外から透明なガラスを貫いて部屋の中に入ってくる、おそらくは西日が差しているんでしよう。そういうことを言っているのに違いないのですが、それを「ええええは玻璃をやぶれど」というものすくく何というか、先端的な、モダンな、超近代的な、そういう言葉の使い方ですらりと書いている。上手いものですよ。

そういうわけで、「きみが手に銀のふほをくはおもからむ。」ですが、昔親しくしていた女性と久しぶりに出会って一緒に食事をした。彼女は女性ですから、指なんかもほつそりしている、手も小さいでしょう、その小さな女の手にその銀のフォークは重すぎて扱いにくいんじゃないかというふうに、こちらが心配をしている、いたわっている。こういう女性への心配とかいたわりとか、そういうのも良いですね。女の人はどこまでそうい

う詩にうつとりするかわかりませんが、男としてはこういうのっていいよなとつくづく思います。もしかするとその女性は久しぶりで詩人に出会ったので、ちょっと緊張してフォークの使い方が少しぎこちなかったのかもしれない、それを詩人は見とがめたのかもしれない、といったような、極めて散文的な連想もいろいろ働くところがあります。

この「再会」という詩は私にとつては大好きな詩の一つなんです、他にも良い作品がいっぱいあります。そういう詩集の序文にですね、初めの方で、昔書いたものだと言い、そして準備に必要だった一年間の終わりの方でもういつべん書き添えたところでは、今度は故郷への恨みつらみを述べている。ですから、本文を読む前にこれらの序文を読むと、いったいこれからこの詩集の中には何が書いてあるのかというのが、読者にとつてもちよつとわからなくなりがねない、そういう危険な序文でもあります。

しかし、とにかくこういう序文を通じて分かるのは、朔太郎に一つ、故郷への嫌悪、と呼んで良ければそう呼びますが、嫌悪みたいな心の動きがあった。そしてもう一つは、その反対として外国への憧れがあったということになるでしょう。これは二律背反で相容れないもの、だから、たとえばそんなに外国に行きたければ行っちゃまえというわけで、行ってしまえばそれで済んだかというのと、どうもそうではないんですね。こういうのはアンビヴァレントと俗に呼ばれるもので、愛憎相半ばしているということになりますから、結局はふるさとへ帰って来ざるを得ない。現に先ほど合唱で歌われた「帰郷」

という詩もそうですよね。「まだ上州の山は見えずや」。まだ上州の山は見えないのかというのが、国へ帰りたくてしようがないというか、まだ上州に着かないのかという苛立ちでしよう。だとすると、決して彼は上州が嫌いだったわけでは、どうやらなさそうですね。

それならば、いったい何がイヤだったのか。この前橋の人たちは朔太郎をばかにし、あれはばかだと言つて後ろから唾を吐きかけたりしたと本人は書いています。つまり、強烈な被害意識を持つているわけです。本当に誰かが唾をかけたかどうか、それは分かりません。分かりませんが、朔太郎の方ではそう思った。つまり自分はここには、周りの人々から受け入れてもらえないんだというふうに、かたくなに思い込んでしまつた。そういうことがありました。今でもこういう環境に不適応な人つていうのは結構いますからね。これは朔太郎一人が悪いわけでもなく、周りの人々が悪かったわけでもない、別にこんなところでけんか両成敗をしてもしょうがないんですが、むしろそういう朔太郎の心の動きに注意しておこうと思います。

### 三、荷風のフランス、光太郎のフランス

これと似たようなことを言ったのに、永井荷風という人がおられます。永井荷風は、例の有名な『あめりか物語』、『ふらんす物語』。この二つはどちらも彼の処女作に近い作品です。これが一気に有名になりました。とりわけ『ふらんす物語』なんかは、彼の海外生活における娼婦、つまり外国の売春婦たちです。

ね、そういう人たちとの交流なんかをあけすけに描きましたので、たちまち発禁をくらった。発禁といえばまあ朔太郎もくらうのですが、そういうわけで、似たような傾向があった。

この荷風が、先ほどの『ふらんす物語』の中で、『ふらんす物語』は後でもう一度引用しますが、最後のところでこんなことを書いています。いよいよ彼もそのアメリカやフランスでの放埒な生活に区切りをつけて、日本へ帰ることになります。これはお父さんが早く帰つて来いと厳しく命じたからです、それで船に乗つてだんだんだんだん日本に近づいて来る。シンガポールあたりまで来たところで『ふらんす物語』は終わるんですが、終りに何と書いてあるかというと、ああ、いよいよ俺も国へ帰るんだなあと思つて日本のことをイメージした。それがこうです。

否いやでも応でも、足の短い、胴の長い、色の黒い、頬骨の突出した祖先の組織した伝来の習慣に服従してしまはねばならぬ。

云々。つまりこれは日本人が荷風に唾を吐いたから怒つたというのではないんですね。日本人は醜いと彼は書く。色は黒い。頬骨が突き出ている、胴長で短足である、実になつとらんと言っている。荷風はいわば美を言いたいのですが、それに比べて日本人間たちは美しくないから嫌だ。そういう連中がそういう連中にふさわしいような因習を作り出す。その因習の網目に再び入つていかねばならぬ、それが嫌だ。というふうには終わ

りのところで荷風は書いてあるわけですね。

ああ、再び見るわが故郷ふるさと。巡査、軍人、教師、電車、電柱、女学生、煉瓦造りにペンキ塗り。鉄の釣橋、鉄矢来やらい。自分は桜さく、歡樂の島ではなくて、シンガポールよりも、それ以下の、何処どこかの殖民地へと流されて行くやうな気がする。

ここで荷風は重大なことを言っています。「殖民地だ、日本は」。つまり、その時の明治末の日本の風物、あるいはそこにいる人間たち、みんなそれは、日本ではないどこかほかの国の殖民地にされてしまったやうな、そういう文化状況の中にある。というふうに喝破しているわけですね。こういうことを言いますと、実はエログロの内容があつたからではなく、危険思想だから発禁になつたというのがどうやら正しかつたのではないのでしょうか。

荷風は後に『珊瑚集』という訳詩集を出しますが、その中でも序文の中に日本の官憲の検閲だの国家体制への批判の封殺だの、そういうことをのしつておりますから、まああのしるといつても、かなりやんわりと皮肉つぽくやつてるわけですが、二度も三度も発禁くらつちやたまりませんからね、ばかなお役人にはわからないように書いてある。それだけの意地悪さが荷風にはあつたわけですが、とにかく大切なのは、荷風はここで、日本人にばかりにされたから腹が立つ、だから俺は外国の方がいいんだというふうには言っていないということ、日本人は醜

いんだから嫌だと言っている。ここがちよつと朔太郎と違つてころですね。

朔太郎は、自分の周りにいる人たちを醜いとか、品性下劣だとか、そういうふうには必ずしも言わなかつたように思いますが。こういうところにその微妙な違いがあるのはおわかりだろうと思います。

荷風はそういうわけで、日露戦争前後の日本を留守にしてアメリカへ行き、それからヨーロッパへ渡り、フランスにはあまり長くないなかつたんですが、帰つて来ました。ちよつど同じころに、高村光太郎という人がヨーロッパに、これもやつぱりまずアメリカへ行つて、それからヨーロッパに渡り、フランスには一年ぐらいいて帰つてきています。荷風と光太郎の間は確かな年齢差が四歳ぐらゐある。光太郎の方が若いわけですね。年齢差はあるんですが、荷風が欧米を一回りしてきたのはだいたい二十代の終わり近く、帰つて来たころはもう三十になつてはいます。それに比べると高村光太郎はもうちよつと恵まれた立場で二十代の前半に行きました。ですから四歳ぐらゐの年齢差はそこで無くなつてしまつて、もしかしたら、むこうの街角ですれ違つていたかもしれないというぐらゐの、まあいわば、きわどいニアミスをやつているわけです。

ところがですね、光太郎はそういうふうにしてフランスを一回りしましたけれども、荷風が海外での体験として、もつぱら女性との交際とかそんなことに筆を限つていたのに対して、光太郎はもうちよつと違う、もつと愚直といえは愚直な、ストリートといえはストリートな、そういう接し方をどうやらして

きたようです。光太郎自身が回想しているところでは、僕はパリですべてを学んだ。女性というものを知ったのもここだけけれども、それ以外にも彫刻だとか何だとかいろいろなものをご自分で学んだ。そしてもちろん、詩も学んだ、というふうに書いておられますので、同じ海外を勉強するにしても、荷風は日本である程度下地を作って、こういうものが読みたいという計画がありました。彼はゾラやモーパッサンに大変打ち込んでおりまして、フランスの自然主義文学を是非とも原文で読んでみたいから、フランス語を勉強する。というふうに言っています、またそれが書かれた国、書かれた風土、そういう所へ行ってみたくてしようがなかったというふうに書いておりますが、光太郎の場合はおうちよつと若いですから、事前に一種の予想を、見当をつけて出かけるというのではなくて、向こうへ行つて初めていろいろ発見するという形で勉強したんだろうと思います。それが一番よく表われているのは詩集『道程』ですね。高村光太郎の有名な詩集ですが、この『道程』の改訂版の方に新たに挿入された「雨にうたるるカテドラル」という、かなり長い詩ですが有名な詩があります。これを冒頭から読んでみます。

### 雨にうたるるカテドラル

おう又吹きつのるあめかせ。

外套の襟を立てて横しぶきのこの雨にぬれながら、

あなたを見上げてゐるのはわたくしです。

毎日一度はきつとここへ来るわたくしです。

あの日本人です。

けき、

夜明方から急にあれ出した恐ろしい嵐が、  
今巴里の果から果を吹きまくつてゐます。

わたくしにはまだこの土地の方角が分かりません。

云々という具合に語りかけている。語りかけている相手は、パリのノートルダム大寺院ですね。パリに行つてこの寺院を見物された方はよくお分かりでしょうけれども、巨大な石造りの建物でありまして、日本のお寺みたいに、周りに塀だの垣根だのがありません。周りはすぐ町並みですから、その中にデーンと巨大なゴシック建築が建っている。だいたいフランスの大寺院というのはみんなそんな具合に普通の町家にすぐ近接したところに、いきなり巨大な石造物として建っている。しかもその石造の大寺院たるや壁面にもうゴテゴテに彫刻を施してありますので、大寺院全体が一つの巨大な石の彫刻のように見える、そういう存在ですね。それへ向かつて語りかけているという、そういうかたちでの詩がここにあります。この詩はこういう具合で百二十行くらいワーツと続く長い詩なので、とてもここで全部は読めませんが、いずれにしても「あなた」というのはこのノートルダム大寺院であり、これを見上げているのは「わたくしです」と言つて、「あの日本人です。」と一言付け加えている。つまり彼は、自分はこの人間、パリの人間ではない。日本という国に生まれてそれなりの日本人としての宿命を背負っている、そういう人間である日本人です。とにかく、あ

なたと対話をしたくてここへやって来た。雨風の中をここへやって来たものです。というふうに語りかけているわけですね。

だいたいパリというのは気候の良い所で、こんな横殴りの雨がまるで台風が来た時みたいにぎあざあ降るといことはほとんどありません。その証拠にフランス人、とりわけフランスの男性は、こうもり傘というのは持たないことになっている。つまりレインコート一枚あれば傘なしで街を歩ける程度にしか雨が降らない。柔らかい雨しか降らない。その証拠に、私も一度雨に降られて、そこらのデパートへ飛び込んで、傘はないかと言ったら、ないと言われたんですね。女物ならあるというんですが、男物はない。そういう国なんです、あそこは。

ですからこのノートルダム大寺院がこうやって集中豪雨みたいなやつにずぶ濡れになっているというのは、かなり珍しい現象であるとお考えください。そういう中で、このゴシック様式の大寺院というのは、いわばある意味で西欧文明の極致みたいなものですから、それに向かつて一人の日本人がその大きな建物を見上げながら、そして石に手を触れながら語りかけている。というかなり激しい構図で書かれた作品だということになります。

光太郎という人は、こういう風に、詩をいわば甘つちよろしい加減なものじゃなくて、何かと対決するような激しい表現として書いて行った人で、それがたまたまあの戦争に出会って間違えてしまうと、今度は戦意高揚の詩をいっぱい書いてし

まった、というようなことにもなってしまうわけです。さらに戦後はそれをまた深刻に自己批判して岩手県の田舎に閉じこもるといふふうに、右に左に揺れ動いた人なんです。あの人がこんなに激しい詩を書かないタイプであれば、もっと適当に折り合いをつけながら動いて行ったかもしれませんが、彼はこういう人です。

つまり彼は、ここで日本を代表してフランス文明と対決しているわけです。それも直接対決をしている。しかしこの直接対決ですが、さらに良く見ますと、「あなたを見上げてゐるのは、わたくしです。／あの日本人です。」という表現は、なにかこう、へりくだって相手を敬っている、そういう言葉遣いではないでしょうか。つまり相手を跪拝きはいしているわけですね。一見対等に対決しているように見えながら、実は跪拝きはいをしている。

この跪拝する高村光太郎の姿勢というのは、すでに我々は荷風の『ふらんす物語』の中で出会っております。『ふらんす物語』の中に「モーパッサンの石造を拝す」という一章があります。パリにはモーパッサンのお墓というのが、確かモンパルナスの墓地にあるのですが、それとは別に、モンソー公園という、これは山の手の方のたいへん優雅な公園ですが、その公園の中に有名な石造がいくつか記念像として並んでいて、その一つにモーパッサンがある。荷風はフランスへ行く前からモーパッサンの作品には憧れておりましたから、ここに書いてある記述に従えば、汽車でパリの駅に着いて、そこから直ちに馬車を雇って、モンソー公園へ行ってくれと言って、パリに着いた初日にこの公園に駆けつけた。パリへ行けばモンソー公園にモーパッ

サンの石像があるとういうことが何かの案内書に書いてあったんでしよう。それを見ていきなりここへ、ホテルへ入るより前にここへ駆けつけた、こう書いてあります。「ああ、モーパッサン先生よ」。ここでも相手に対するデスマス調ですね。

ああ、モーパッサン先生よ。私は今、巴里の停車場へ着くと、直ちに、案内記によつて馬車を走せ、先生が記念石像の下に、身を投げかけています。

という具合に、モーパッサンを跪拝しちゃうんですよ。何行か先に、

私は先生のように、発狂して自殺を企てるまで苦悶した芸術的の生涯を送りたいと思つています。私は、先生の著作を読み行く中に、驚くほど思想の一致を見出します。私等が今日感じた処を、先生は已に三、四十年前に経験しておられたのです。

それからまた数行飛ばしますが、最後のところ、

私はこれから、先生の遺骸を埋めたモンパルナスの墓地に参詣しましょう。私のささげる一束の花を受け下さい。ああ、崇拜するモーパッサン先生。

これで終わるんです。私は実は初めてここを読みましたとき

に、たかがモーパッサンごとにおおげさではないかと思ひました。今日の日本ではモーパッサンの評価はそう高くはありません。しかしこの荷風の時代には、つまり明治末には、モーパッサンの評価というのはたいへん高かつたんですね。モーパッサンの先生だつたのはフロベールですが、フロベールなんかよりはるかに高かつた。今ではもう十九世紀の小説家と言えれば何と言つたつてフロベールで、モーパッサンなんかはずいぶん影の薄いものです。その次がゾラ、それからバルザックとスタンダール、というようなところでしょう。

そういうわけで、多少はモーパッサンを崇拜したつてそれは別にいけないとは言えませんが、こうやつてひざまずいて拝むつていうのは、いくらなんでも少しやりすぎではないかというのが、これを最初に読んだ時の、まだ学生時代だつた私の感想です。しかし、実は単にペコペコお辞儀をしているだけじゃなくて、あなたという人がどういうものを書いたかなどというふうなことを、いろいろに荷風は書いておりました、一種の評論のようにもなつておりますので、それを読みますと、フランスの文化・文明の高さというものをその時点で荷風はそれなりに評価していたに違いない、その評価が街角で出会う売春婦のごときものにまで反映していたのかもしれない、というふうに思われます。こういうことは、よくあるんですよ。

日本でもかつて社会主義というものが非常に高く評価された時代がありました。それで、そういう時にソビエトへ旅行に行った人がいます。この人自身もかなり左翼の人。ですからソ連というのは地上の樂園だと思つていた。地上の樂園と

という言葉はどこかで聞いたことがありますけどね。すぐお隣に近いくところの国もそう思われていたらしいんです。それで、ソ連へ行つて、夜モスクワの街を、ウォッカの一杯や二杯飲んでいい機嫌で歩いていたら、街角で女性に袖を引かれてしまった。社会主義の樂園であるはずのソ連に売春婦がいるのか、と言って、その人は泣き出したと言うんですよ、そういう話を聞いたことがあります。ですからプラス方向かマイナス方向かは別にして、我々のこういう外国に対する思い込みというのは、かなり気を付けなければなりません。

そういうわけで、朔太郎の書いた故郷へのいわば憤りと、荷風の書いた日本への憤りは共通するようである。実は正反対だ、正反対でありながら、しかし共通はしている、というそういうものでしょう。荷風は、人間関係についてはかなり筆を費やしましたが、自然や風景については、あまり書いておりません。ところが朔太郎は、「まだ上州の山は見えずや。」と言った。「山」と言ったんです。「上州の人々は見えずや。」じゃないんです。山、つまり自然の要素をかなり取り入れていて、この自然がある種の調停者となつて、彼を故郷から切り離したり、故郷に迎え入れたたりした。そういうものだったように思います。

#### 四、ここにはないものを求めて

では、朔太郎を突き動かしていた本当の、外国への憧れというものはどんなものだったのでしょうか。実は朔太郎自身が、「日

本への回帰」という有名なエッセイの中で、明治以来の日本の文化風潮をなぞりまして、明治時代の鹿鳴館だとかなんとかの欧化政策、ひたすらヨーロッパ的であろうとする日本の政策について書いています。ヨーロッパ風のダンスパーティーまでやって、自分たちもヨーロッパ人と対等平等だよということを必死に言わないと不平等条約の改正ができなかった、という事情もあるんでしょうけれども——そうでないといふ日本は一格低い国民であり、低い国だと見下されますから、それでは不平等条約は改正できない——そういうことがまあ、あつたにはあつたんでしよう。

けれども面白いのは、たとえば当時の日本の外務省が、日本を紹介する映画を作つて、各国の大使館にそれを流して、日本をこれで紹介しなさいと言つて命令した。各国の大使館ではその上映会をやつたんですが、その中にどういうわけか、雪景色が非常に多いということが分かりました。何でそんなに日本の雪景色を写すのかといえば、実はヨーロッパやアメリカは寒い国なので、雪の降らない国は下等な国だと思われる、そ



れを恐れたということのようです。嘘のようで本当の話です、これは。現に私は、たまたまフランス文学をやったのでそれを知っていますが、フランスの外交官は、日本に派遣されて日本に滞在する時は、普通の手当てのほか、熱帯手当とというのをもらっていたと言われております。つまり日本は熱帯に属していると思われたわけで、そういう国へ行くのは、ご苦労様なことだ、体をこわさないように頑張ってくれということで、お手当てがついていた。日本側から見ればとんでもないことですから、そこでやや過剰に雪景色を映画に写したということにどうもなるらしいんですね。こういうヨーロッパ人・アメリカ人が口には出さないけれど腹の中で思っていること、つまり雪の降る国が高等な文明国であり、雪の降らない国は下等な野蛮人どもの国である、というようなこと、これは誰も文章に書きません。口でも言いません。だからわからないんです。わからないけれど、腹の中にはそれがあるわけです。

ユダヤ人嫌いなんていうのもそうですよね。私がやはり仕事でパリへ行きました時に、パリで下宿探しをやるうかと思つて、知り合いのフランス人のおばさんに相談したら、じゃあ私が案内してやるから一緒に行こうと言ってくれて、一緒に出かけました。それで、ある、わりとしゃれたアパートを見つけてまして、そこへ入って行くとしたら、そのおばさんが「やめなさい。ここは駄目だ」と言つて引き止めた。「なぜですか。」と聞いたら、入り口に入居者の名札がずらつと並んでいる。「これはみんなユダヤ人だ。名前でわかる。こんなユダヤ人ばかりのところに住むもんじゃない。」と言うんですね。やつぱり

普段は口に出さなくても、そういう差別・偏見はあるんです。私どもも過去にそういう差別・偏見をしてきたことがないとは言えないですね。私自身の子供のころにも、朝鮮の人たち、あるいは中国の人たちをずいぶんばかにした記憶が今でもあります。今となつてはこちらの心の傷ですが、何のいわれもなしに、ただ周囲をまねて、朝鮮生まれだというだけでばかにしたというふうなことが、確かに私自身についてはあつたんです。だからきつとほかの人にもあつたらうと思います。そういうことがあるから危ないのですけれど、一言で言つてしまえば明治以来の日本の文化政策の柱であつた「脱亜入欧」、つまり、アジアを脱してヨーロッパに入らうという思想が脈々と生きていた中で、の発言だつたというふうに考えれば、ある程度見当がつくのではないかと思います。

萩原朔太郎も海外に滞在した経験はありませんので、彼にとつての異国はとりあえずは東京でありました。つまり前橋を捨てて東京へ出て行くと東京には都会的なもの、近代的なもの、いろいろある。前橋にはないものもある。それを喜んだということかもしれない。彼には「この美しい都会を愛するのは良いことだ」で始まる有名な詩「青猫」もありますね。「都会を愛する」。しかし、東京に彼が見出ししていたものは、いったい何だつたんでしょう。「都会」と言つただけではよくわからない。それは単なる近代でしょうか。そのようにも見えますが、モダンなものなら、ハイカラなものなら、現に朔太郎自身がそうであつたように、この前橋にもなかつたわけじゃない。朔太郎はこの前橋でマンドリンを弾いていたんです。マンドリンなんて



いうしやれた楽器が前橋にもなかつたわけではないんです。

では、いったい彼は東京に何を求めていたんだろうか。たぶんそれは、映画館だとか、遊園地だとか、いずれにしても我々を現実の外へ連れ出してくれて、非現実を体験させてくれる、そういう空間。どうもここに彼のねらいはあつたようでありま  
す。その証拠に彼は映画をずいぶん高く評価して、いろいろ映画を見ておられますし、遊園地の詩も書いておられます。それだけではなくて、やはり一生彼がそれを大切にしてきたものの一つに手品がありまして、この手品というのも、現実にはあり得ないことをさもあり得たかのように見せる手段ですから、それを自分が演じて人にやってみせ、あるいは自分より上手な人がそれを上手にやるのに関心したり、そういうふうなことを繰り返して、つまりは今のこの現実からいかにして抜け出すかということを、一生懸命やっていたのではあるまいかと思えます。

さらには彼の書いた『猫町』という短い小説がありますね。これなんかは猫の町という不思議な空間がとんでもない片田舎にポーンと出現するわけですから、これは都会とは関係がない。じゃあ、彼にとつてのその猫町の幻想というのは何によつて生じたかと言え、どうも自分は方向音痴で地理音痴で、すぐに方角が分からなくなつてしまふ。一つの町をたとえば北からばかり見ていると、それを南から見たときに、もうそれが同じ町だということがわからなくなつてしまふ、というようなことを書いていますので、いわば、方向感の喪失といったようなものによつて異空間を出現させて味わう、あるいは楽しむ。そういうふうなことを彼自身が体験もし、自分でもやっていた。

そうなると、彼が前橋の人々に対する憎悪をぶつけたりなんかというのは、どうも言い訳のような気がしてくるんですね。現にこうやつて、彼より何代か後の前橋のの方は、非常に彼の仕事を大切にしておられます。そういうことだから考えたつて、そんなに前橋の人はのしるべき相手だつたとは思えない。そうではなくて、彼がそういう異空間に行つてみたい、異空間に行きたいという気持ちを強くもつていたからでありまして、これが荷風とは決定的に違ふところであるし、また高村光太郎とも決定的に違ふところではあるまいかと思えます。彼はそうやつて見つめたヨーロッパの風物・文物の向こうに何を  
見出していたのかと言え、やはりそれは詩ではないでしょうか。彼はフランスについてはあまり筆は費やさなかつたけれども、ボードレールについてはある程度の文章を、短い文章ですが書いておられます。そこでのボードレールに対する分析というのはなかなか面白いのですが、残念ながらもう時間がありませ  
ん。その分析が合っているかどうかもちよつと疑問だと思いま  
すが、だいたいこんなふうなことを言つておられます。

ボードレールは普通の詩とそれから散文詩とを書いてる。散文詩は非常に理知的に書いた、普通の詩は感情的に書いた、それを両方書くというのがボードレールの中である種の二律背反の、あるいは二重人格みたいな分裂を引き起こしている、  
というふうに書いています。ボードレールは決してそんなに分裂してはなかつたんじゃないかと私は思いますけれども、朔太郎にはそう映つたんでしょう。朔太郎は、『宿命』という詩集に——あれは散文詩集ですね——、「郵便局」という

詩を書いていきます。

郵便局といふものは、港や停車場やと同じく、人生の遠い旅情を思はすところの、悲しいのすたるぢやの存在である。局員はあわただしげにスタンプを捺し、人人は窓口に群がつてゐる。わけても貧しい女工の群が、日給の貯金通帳を手にながら、窓口に列をつくつて押し合つてゐる。

こんなに大勢の女工を見たというのは、たぶんこの前橋でまだ生糸産業が盛んだった時期にだったのではないだろうか。それから、彼が後に東京で大森のあたりに住んだときも、あの辺にも工場がありましたから、そういうところにも女工さんがいたかもしれない。それで最後は、

郵便局といふものは、港や停車場と同じやうに、人生の遠い旅情を思はすところの、魂の永遠ののすたるぢやだ。

最後の「永遠ののすたるぢや」というのは何のことかよく分かりませんけれど、まあある詠嘆だけは感じられますね。こういう散文詩を書いている。さっきの「雨にうたるカテドラル」が荷風の「モーパッサンの石像を拝す」と似ていたように、何かこれに似ている作品がなかったでしょうか。それはボードレールの散文詩「港」であります。これは短いから読んでみます。

港は人生の闘いに疲れた魂にとつて、魅惑的な場所である。空の広がり、雲という動く建築、絶えず変化する海の色彩、灯台のきらめき、そういういたものが飽かせずに目を楽しませる絶好のプリズムとなる。複雑な艦装を凝らしたスラリとした船のかたち、その船に波が調和のとれた脈動を伝えているのが魂の中にリズムと美への好みを養うのに役立つ。それから特に、もはや好奇心も野心も無くしたものとつては、一種の神秘的な貴族的な楽しみでもあるのだ。展望台に寝そべったり、防波堤に肘を付いたりしたまま、出て行くものと帰ってくるもの、まだ望みを持つだけの力があり、旅行したり金をもうけたりするだけの欲求があるものたちのあらゆる動きをじつと眺めていることが。

そっくりですよ。それもそのはず、朔太郎自身が「宿命」という詩集のあとがきの中で、ぼくのこの「郵便局」という散文詩はボードレールの「港」と一対をなすようなものを書こうと思つて書いてみたんだと、自分ではつきり言っています。しかしこの、一対をなすようなものを書いてみるというのは、ある意味ではすごいことですよ。それは単にまねをしたんじゃない。模倣したのでもない。素材を借りたのでもない。この「港」が、それを見る人にとつてこういうものだという、ボードレールのそのプレゼンテーション、提示を受けて、それと同じプレゼンテーションを「郵便局」でやってみたということですから。単に表面的に模倣だの盗用だの材料を借りたの、そんな

ものじゃないんですね。そのもう一つ奥の詩人の感受性、詩人の姿勢、詩人の態度みたいなものをこっちへ引っ張って来ようとしている。そういう意味では、仮に同じ模倣という名前をつけられるかもしれないにしても、もつと本質的なものを模倣しようとしていた。言葉のうわべだけじゃない、そういうものですね。こういう模倣の仕方を考え、その模倣の対象にボードレールを選んだというだけでも、朔太郎はまさに日本のボードレールと呼ばれるだけの値打ちのある人だったということになるのではないのでしょうか。

朔太郎にとつての「異国」というのは、どうやら現実のフランスではなくて、そのフランスの中で人間がどういう心の動きを起こし、どういう文学を作るか、そこまでを見据えたものであった。ということになりますと、彼にとつての「異国」というのはまさにここにはないもの、ここではどうしても手に入らないもの、それであつたということが言えると思います。

その証拠に彼は逆に、外国人として日本にやって来た小泉八雲を高く評価し、八雲の書き残したいろいろな文章を論評しております。これについてもお話ししたいことはあるんですが、もう時間がないからやめます。となると結局、「異国」というのは詩そのものではあるまいか。詩人はみな彼の異国を持つと言えるのではあるまいか。本当はここからもつとこのテーマを掘り下げたいのですが、そういうわけで、今日は井戸をのぞき込んだだけで終わるということにいたします。

どうもご静聴ありがとうございました。



## 安藤 元雄 (あんどう もとお)

1934(昭和9)年東京生まれ。東京大学仏文科卒。明治大学名誉教授。

日本現代詩人会会長。フランス語フランス文学会会員。

詩集に『水の中の歲月』(1980年、高見順賞)、『めぐりの歌』(1999年、萩原朔太郎賞)、『わがノルマンディー』(2003年、現代詩歌文学館賞・藤村記念歴程賞)。

翻訳にボードレール『悪の華』(1983年)ほか多数。